平成 29 年 12 月 15 日

群馬史跡巡り、説明版

本書はところ会総会にてパワーポイントを使用して発表した「群馬史跡巡り」の補足説明資料です。パワーポイントのデータと一緒に見て下さい。
パワーポイントデータは次をクリックして下さい。

https://1drv.ms/p/s!AilHoJTwB3UWnEXxejScg1sJz_zb

本資料をまとめるために、各種ブログから転用掲載していますので著作権等に問題が生じる場合があります、取り扱いには十分な配慮をお願いします。

01（スライド№･･以下省略）：
見出し
2018.01.25：新田氏関連勉強会資料：2 月バス旅行：群馬史跡巡り、新田義貞義貞関連史跡巡る：(所沢の史跡との関連について)

02：
目次
2018.2.16／群馬史跡巡り、新田義貞義貞関連史跡巡る／(所沢の史跡との関連について)
(1)古代篇：所沢の東の上遺跡との関連で
(2)中世篇：所沢市内の新田義貞関連の史跡について
(3)新田荘の史跡関連図
(4) 新田一族
(4-1)：清和源氏新田流　新田氏系 図
(4-2)：新田一族･･概略年表
(4-3)：新田一族･･出身氏族は清和源氏
(4-4)：新田一族と所沢の大舘氏
(4-5)：新田義貞の生い立ちから鎌倉幕府倒幕まで
(4-6)：笠懸野
(4-7)：新田義貞関連の画像
(4-8)：小説「新田義貞」から
(4-9)：太平記
(5) バス旅行の訪問地
(6) バス旅行の参考史跡

03、04：
(1)古代篇：所沢の東上遺跡との関連で
東山道と東山道武蔵路(スライド名)
※：古代の地理的行政区分としては、畿内五国（山城・大和・河内・和泉・摂津）に、東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道の五畿七道がありました。また七道は地域呼称であると同時に、都から地方にのびる道路の名称でもありました。このような行政区は天武朝（672～686）頃に成立したと考えられており、当時の都は飛鳥浄御原宮で、それに先だった斉明朝から天智朝にかけて伝馬制や駅制が始まっていて、天智朝には「国」の設定や庚午年籍（初めての全国的な戸籍）の作成など国家としての支配体制が整いつつありました。
※：東山道は都から東の山間部の行政区とその官道を言います。平安時代の『延喜式』によると、東山道に属する国は、近江・美濃・飛騨・信濃・上野・下野・陸奥・出羽の八カ国ですが、それ以前には幾多の変遷があったと思われています。
※：武蔵国は『延喜式』では東海道に属していますが、奈良時代の宝亀 2 年（771）に東山道から東海道に所属替えされたことが、『続日本紀』の記事で確認出きております。武蔵国が奈良時代の末期以前には東山道に属していたことから、武蔵国は東山道経由で都と繋がれていのです。その時代の官道（駅路）が東山道の本路からどのような経路で武蔵国府へ繋いでいたかが、これまで論議されてきました。この東山道時代の武蔵国の駅路を当時はどのように呼ばれていたかはわかりませんが、現在では「東山道武蔵路」と一般的に呼ばれています。
※：東山道武蔵路については上野国の新田駅付近から本道と分かれて邑楽郡を通り武蔵国に入ります。そして五つの駅家を経て武蔵国府に到り、再び同ルートを北上して下野国足利駅で東山道の本道に合流したものと考えられるようになってきています。上野国新田駅より武蔵国府中までこの間の距離約 80

キロメートルで、武蔵国府の付近に一駅を置いて駅間距離（約 16 キロメートル）で 4 駅を配置してみると（スライド 03/37)のようになります。

推定東山道−新田町・太田市の地図(スライド名)

※：古代東山道と中世東山道‥新田荘には古代の東山道が東西に横断していました。この東山道については、従前は東道と称され所々に「東」地名が残る東道ルートが否定されていましたが、近年の発掘調査の成果によって牛堀・矢の原ルートと呼ばれているルートはがほぼ幅員 12 メートルで側溝を有する古代東山道であることが確定しています。さらに 2003～4 年の金山丘陵北部の西・東側の調査で、古大道で発掘調査が行われ、金山丘陵の北端を山越えする道筋が想想定されるにいたっています。従前の東道ルートは古代東山道としては否定されています。しかしこの東道ルートは近世以降にまで道路乃至地名が残った中世東山道であると考えられています。古代の交通路と中世のそれとは利根川の変流による渡航点の変更よって姿を変えたと想定されています。新田義貞軍の西への進路はこの中世東山道をたどったと言われている。

※：笠懸野‥この道路が通過する地域は、大間々扇状地の扇央部分にあたり、灌木や草の生い茂った広大な荒蕪地を形成しています。この地域は、新田一族・家臣の武技訓練の場となり、弓馬の術を錬磨する場所となっていました。それゆえ笠懸野という地名で称されるようになった。

東山道

❒：牛堀・矢の原ルート

※：牛堀・矢の原ルート‥新田町小金井から村田にかけての新田掘用水は、近年発掘調査が活発に行われた東山道の牛掘・矢ノ原ルートの東延長上に存在し、この間の新田掘用水は東山道の北側側溝を後に転用したことが判明しています。東山道の牛堀・矢ノ原ルートは伊勢崎市から新田町まで 12 キロほどが直線道であることが知られていて、武蔵路との分岐点以東も道が続いていることが調査されています。

※：推定東山道駅路‥東山道駅路は、古代（およそ 1,300 年～1,000 年前）に奈良の都と東国とをつなぐ官道として整備されました。近年の発掘調査によって群馬県の南部を東西に通過していることが分かり、調査された遺跡の名前から「牛堀・矢ノ原ルート」と命名されています。

駅路は、旧佐波郡境町（現伊勢崎市内）から新田地区まで、およそ8kmに渡って一直線に造られ、幅 12m～13mの路面の両脇に側溝を持つ広大な道路であることから、東山道駅路であると考えられるようになりました。現在のところ、7世紀後半頃に造られ、8世紀中頃には使われなくなったと考えられています。

太田市西部では、7地点でこの遺構の発掘調査が実施されています。大東地区では、毎年ヤマトイモの収穫後に畑の中で道路遺構側溝のソイルマーク（土壌痕跡）が観察できます。また、太田市北東部の北関東自動車道の建設に伴う発掘調査により東山道駅路と推定される遺構が4遺跡、約1kmにわたって発見されており、この遺構がさらに東に伸びることも分かってきています。

❒：下新田(しもしんでん)ルート

※：ここで上野国の東山道本路と推定される、牛堀・矢ノ原ルート以外の道路遺構を上げて置きます。新田町市で調査された下新田遺跡は牛堀・矢ノ原ルートの北 500 メートル付近に並走する道路遺構が検出されています。両側溝間の心々距離 12 メートルで硬化面も確認されています。この道路遺構の時期についてはハッキリしていないようですが、天仁元年（1108）の浅間噴火以前の遺構であることはわかっているようです。➡下新田ルート(中世東山道)と推定【居田推定】

※：この下新田遺跡のルートの東延長上に新田郡家に推定される天良七堂遺跡があり、その付近には新田郡寺と推定される寺井廃寺も存在します。この 500 メートル北の道路遺構と牛堀・矢ノ原ルートの関係はわかっていないようです。何故そんなに離れていない付近に幅 12 メートル前後の道が二つも存在したのでしょうか。今後の研究でその謎が解明されるのを待つのみです。

東山道武蔵路

※：東山道武蔵路については上野国の新田駅付近から本道と分かれて邑楽郡を通り武蔵国に入ります。そして五つの駅家を経て武蔵国府に到り、再び同ルートを北上して下野国足利駅で東山道の本道に合流したものと考えられるようになってきています。上野国新田駅より武蔵国府中までこの間の距離約 80 キロメートルで、武蔵国府の付近に一駅を置いて駅間距離（約 16 キロメートル）で 4 駅を配置してみると（スライド 03/37)のようになります。

東山道に関する他のブログから

※：東山道駅路は群馬県太田市で発掘された東山道跡で、八ヶ入遺跡（はちがいりいせき）・推定東山道駅路跡といわれ、八ヶ入遺跡から西へは金山丘陵を越えて新田町で発見されている東山道駅路の遺構へと繋がっていたものと思われます。

※：八ヶ入・大道東・鹿島浦の３遺跡を繋ぐ 1 キロメートルの東山道駅路跡は西は金山丘陵を越えて新田町の牛堀・矢ノ原ルートに繋がるものと思われます。ただ、若干方位が異なるようで、これは金山丘陵を越えるにあたり、地形に影響されて居るとも思われます。また、新田町で発見されている牛堀・矢ノ原ルートの北、500 メートルで発見されている謎の古代道とも繋がる可能性も指摘できそうで、いろいろな想像をかき立ててくれます。

※：群馬県内を通る東山道駅路は佐波郡境町から新田郡新田町にかけて、約 10 キロメートルにも及ぶ直線のルートが発見されていて「牛堀・矢ノ原ルート」と呼ばれているものがあります。道の両脇に側

溝があり、その幅約 12 メートル前後です。このルートは上野国府とは大きく南に離れて通っていますが、使用された時期は 7 世紀後半から 8 世紀後半と考えられているようです。

05：

東山道武蔵路・東の上遺跡地図

所沢市東の上遺跡

※:東の上遺跡は、狭山丘陵を南に望む柳瀬川左岸の武蔵野台地縁辺に立地し、面積は約 30 万平方メートルを擁します。これまでの発掘調査によって、縄文時代から中世・近世にかけて各時代の遺構が検出されていますが、とりわけ奈良・平安時代には大規模な集落が営まれており、入間地区でも屈指と言われています。

※:特に南陵中学校の校庭から検出された幅約 12 メートルの道路跡は、古代国家の幹線道路「東山道武蔵路」として埼玉県内で初めて確認されました。また、墨書土器や漆紙文書、炭化した大量の米、帯金具や馬具などを出土していることから、役所の働きをする集落であったと推測されます。

06：

東山道武蔵路・柳の遺跡地図

所沢市下富の柳の遺跡

※:写真は平成 26 年 3 月時点の発掘現場で、遺構は埋め戻され駐車場となっています。発掘地点はネオポリス西信号の北約 200 メートルで老人ホーム真和の森の前道路対面側です。

※:発掘された道路跡は幅8メートルで、現在車道の下にも道路跡と東側側溝が埋まっているものと考えられています。

07、08：

⑵中世篇：所沢市内の新田義貞史跡の関連について

所沢の新田義貞関連史跡（スライド名‥2 枚とも）

※:小手指ヶ原古戦場の碑‥

※:将軍塚‥義貞が戦の際に陣を敷き、軍勢を指揮した場所

※:小手指白旗塚‥義貞が源氏の白旗を立てた場所

※:鳩峯八幡神社‥1 月 5 日の初水天宮にはだるま市が開かれ、初詣客で賑わう。神社本殿は県の指定文化財。新田義貞が戦勝祈願に立ち寄り、兜をかけたと伝わる「兜掛けの松」がある。

※:勢揃橋‥新田軍が勢揃いした場所

※:誓詞ヶ橋‥倒幕を誓った場所

※:兜掛けの松‥新田義貞が戦勝祈願に立ち寄り、兜をかけたと伝わる

※:義貞公誓いの桜:山口観音

※:義貞公霊馬:山口観音

※:箙の梅(えびら)

❑：箙の梅

※：所沢市三ヶ島に「箙の梅」と呼ばれる一本の梅の古木があります。箙（えびら）は矢を入れて背負う武具のひとつです。「箙の梅」で検索すると、1184 年、源平生田の森の合戦で梶原景季が梅の枝を挿して戦った故事とあり、能や浄瑠璃の題材にもなっています。

※：スライドの写真の「箙の梅」は源平の故事ではなく、「太平記」の時代に関係しています。

※：足利尊氏が室町幕府を開いたあとも、各地で敵対勢力の動きが活発化し、1352 年、新田義貞の遺児、義興・義宗が後醍醐天皇の皇子・宗良親王を奉じて、足利氏に戦いを挑み、この一連の戦いは「武蔵野合戦」と言われます。

※：小手指ヶ原では新田義宗に足利尊氏が軍勢を率いて対決しました。「太平記」によると、足利軍の饗庭命鶴丸（あえばのみょうつるまる）が付近の梅の枝を折って箙に挿し、戦いに挑んだ場面が記されています。

※：その故事に因む梅の木なのですが、本当だとしたら樹齢 660 年以上の古木になります。梅の古木には樹齢 800 年というものもあるらしいので、この木が「太平記」の時代からの古木であってもおかしくはないのですが、どうなのでしょう？

❑：「箙の梅」の由来　　平成 16 年 2 月　所沢市観光協会の掲示板より

※：箙‥矢を入れて背負う武具の一つです。「箙の梅」は正平 7 年（1352）群馬県で挙兵した新田義興らと足利尊氏らが小手指ヶ原で一線を交えた際、足利方の饗庭明鶴丸(あえあばみゅつるまる)を大将とする一隊がこの地の梅の枝を折り、鎧や箙に差して戦ったとされるに故事にちなむものです。

※：江戸時‥幕府が編纂した『新編武蔵風土記』のの三ヶ島村の項には「古戦場字下田という所に東西に流れる小流あり。(中略)化の流れに沿いて数株の梅樹あり、これ太平記に載せたる花一揆の人々、梅花のえだを折りて箙に差したりとあるは、この梅林の枝を折り取りしなりという」と紹介されています。

※：昭和の初期‥東川沿いに 30 本の梅樹が点々とありましたが、道路・河川の改良によって取り除かれる運命にあったものを、「箙の梅」のなごりを留めるため、その 1 本をこの地に移植したものです。

❑：椿峰（つばきみね）‥時は鎌倉末期、北条氏の天下でありました。北条は、もともと源氏の家来に過ぎず…。この間違った天下を正すべく、上野国で一人の男が立ち上がりました。男の名前は、新田義貞といい、八幡太郎（源義家）から続く清和源氏の正統な家柄でした。「我らに八幡大菩薩のご加護を！」男はそう叫ぶと一族と供に、鎌倉めざして攻め上りました。小手指ヶ原で鎌倉幕府軍を撃破し、その後八国山に向かう途中のことです。椿の枝を折って箸にし、腹こしらいに食事をしました。食事を食べ終わり、その椿の箸を地面に突き刺したところ、根付いて花が咲き、やがて峰全体が椿で覆われたということです。新田義貞がそれから、二十万七千の兵を率いて、鎌倉幕府を倒したことは今では周知のとおりです。

9、10、11：

(3)新田荘の史跡関連図

太田市の関連地図（スライド名‥3 枚とも）

※:1 枚目‥今回訪問予定の訪問先を記載

※:2、3 枚目‥史跡新田荘遺跡と今回訪問先を図示（左上の訪問先を順に記述）

❑：新田荘遺跡（にったのしょういせき）は、上野国新田郡（群馬県太田市）にあった荘園新田荘に関わる遺跡。荘域は上野国新田郡全域・勢多郡・佐位郡・武蔵国榛沢郡の一部に及び、おもに大間々扇状地と利根川左岸氾濫原がその場所です。『延喜式』には上野国新田駅、『和名類聚抄』では新田郡駅家郷と記されている。中世武士団新田氏一族の根源地として成立し、長楽寺文書、正木文書によって文献史料の裏付けを可能とする東国の中世荘園として稀有な例である。2000 年（平成 12 年）、新田氏遺構群のうち 11 箇所が国の史跡に指定され、「新田荘遺跡」として保存されています

新田氏遺構群のうち下記の 11 箇所が新田荘遺跡として国の史跡に指定されています。

- 円福寺境内（太田市別所町）
- 十二所神社境内（太田市別所町）
- 総持寺境内（太田市世良田町）
- 長楽寺境内（太田市世良田町）
- 東照宮境内（太田市世良田町）
- 明王院境内（太田市安養寺町）
- 生品神社境内（太田市新田市野井町）
- 反町館跡（太田市新田反町）
- 江田館跡（太田市新田上江田町）
- 重殿水源（太田市新田市野井町）
- 矢太神水源（太田市新田大根町）

新田荘遺跡地図（太田市）（スライド名‥2 枚とも）

※:新田荘の立地‥古代の新田郡の領域ほぼ継承した新田荘には、東部には八王子丘陵とそれに南雪接する金山丘陵があります。これら丘陵の東に細長く伊勢皇大神宮領園田御厨が立地しその東を渡良瀬川が流れています。西側は新川（新里村）から南に流れ下る小河川の早川、南は関東の大河利根川の流れ、北は鹿田山の丘陵群によって南北に長い二等辺三角形(扇を逆さにした形)の計上をしています。現在の行政区割りでいえば、太田市(合併によって新田・尾島・飯塚の三町を含む)と新田郡笠懸町、佐波群東村や堺町の一部(伊勢崎市に合併)、勢多郡新里村新川(桐生市に合併)、それに利根川南の深谷市の一部に広がっています。

※:大間々扇状地と東・北部丘陵‥ここは、地質学的には大間々扇状地といわれる渡良瀬川が地質年代に開析した緩傾斜の平地であります。大間々扇状地は新古二つの扇状地から成り、西側の古扇状地の上には渕名荘が形成され、新たに開析された一段低い東側の新扇状地には新田荘が形成されています。いわゆる二つの扇状地、二つの荘園の境界を早川が流れています。南の利根川は、古代・中世には現在よりは少し南を流れ、現在利根川南岸に位置する横瀬・田島・小角(こすみ)(いずれも埼玉県深谷市)などの郷は中世の新田荘に属していました。ところが、十五世紀前半に推定される利根川の変流によって、以前に前橋市街地の広瀬川筋を通り伊勢崎市街地に西から現利根川筋へ南流していたものが、前橋市街地の西を南進して玉村町の北を通るほぼ現河道に転換した。このため、新田荘の南を迂回していた河道が変流をおこし新田荘の三ヶ郷を分離してしまった。十五世紀後半の享徳の乱の過程で記録された「岩松持国知行分注文」に、「高嶋郷六ヶ村、横瀬郷、彼の二ヵ所川向たるによって敵方知行」(「正木文書」)とあり、この時期には現在の河道に利根川が流れていたことは確認される。この取り残された地域は、「国境河川地域」として、いくつかの河岸の渡船によって北側との連絡を保っていました。

※:湧水‥扇状地の特徴として、扇の要すなわち扇頂部の地域では、丘陵部からの水流はあるが扇央部では水は地下を潜り伏流となり、それが扇端部ではいっせいに湧水となって噴出する。この扇端部に東から西へ寺井・上野井・市野井・今井・田部井(ためがい)といった井(湧水池)のつ

く地名集落が並び、湧水は南に広がる水田に灌漑する。これが新田荘の農業生産の基盤である。国指定新田荘遺跡と指定された重殿用水や矢代神沼(やだいじんぬま)、それに一文字池などは新田氏市野井に今日に残る井(湧水)1960 年代に私が調査を開始した時には、市野井を中心に多くの井が機能していたが、その後の群馬用水の引水や圃場整備事業よって次第に消滅していきました。

(4) 新田一族

12、13、14、15：

(4-1):清和源氏新田流　新田氏系図(スライド名‥1 枚)

(4-2):新田一族‥概略年表(スライド名‥1 枚)

(4-3):新田一族‥概要-1、2(スライド名‥2枚)

※：新田一族：出身氏族は清和源氏である。平安時代の終り頃、源氏の流れをくむ源義国父子は上野国の新田郡を中心に開発を進め、子の義重は領地を広げて新田荘を興し、東国武士の礎を築きました。新田氏の一族は上野国を中心に栄え、鎌倉幕府を倒幕し、建武新政を成し遂げた新田義貞のような武将を生みましたが、その後室町・戦国時代には衰退し、戦国末期には上杉・武田・北条氏の勢力が相争う地となっていました。

※：清和源氏（せいわげんじ）：第 56 代清和天皇の皇子・諸王を祖とする源氏氏族で、賜姓皇族の一流です。姓は朝臣で、清和天皇の皇子のうち 4 人、孫の王のうち 12 人が臣籍降下して源氏を称しました。中でも第六皇子貞純親王の子・経基王（源経基）の子孫が著しく繁栄しました。

※：中級貴族であった経基の子・源満仲（多田満仲）：藤原北家の摂関政治の確立に協力して中央における武門としての地位を築き、摂津国川辺郡多田の地に武士団を形成しました。そして彼の子である頼光、頼親、頼信らも父と同様に藤原摂関家に仕えて勢力を拡大しました。のちに主流となる頼信流の河内源氏が東国の武士団を支配下に置いて台頭し、源頼朝の代に部門の棟梁として鎌倉幕府を開き、武家政権を確立しました。

※：その後の子孫：嫡流が源氏将軍や足利将軍家として武家政権を主宰したほか、一門からも守護大名や国人が出ました。また一部は公卿となり、堂上家として竹内家が出た。一般に武家として知られる清和源氏の起源は、清和天皇の第六皇子貞純親王の子である経基王（六孫王）が臣籍降下により源姓を賜り源経基と名乗ったことに遡ることが出来ます。

16：

(4-4) 新田一族と所沢の大舘氏について(スライド名‥1 枚)

※：大舘氏：新田の一族で、鎌倉で死んだ大舘宗氏の六男の義隆が所沢大舘氏の始祖となる。義隆は 5 月 11 日の小手指ヶ原の戦いで傷つき 15 日に死んだ。その長男義信は武蔵野合戦等で戦ったが、その子の義継が「義衛門義継」と百姓名に改め以来約 30 代続いています。

❑：武蔵国の大舘氏

※：埼玉県所沢市には、宗氏の子孫と伝えている大舘氏があり、もと後北条氏被官の配下で北条氏敗北後、家康の関東入部後に帰農した一派といわれます。室町幕府に仕えた一族との関連は不明です。江戸初期には筆頭名主となった大舘傳右衛門（助右衛門）家があります。この家は領主の旗本・花井氏と関係が深く、家康小姓・花井庄右衛門吉高の廃嫡男子・庄五郎吉政と婚姻関係を結び、この子孫も傳右衛門家の分家筋として大舘姓を称しています。のち江戸後期に大舘傳右衛門家から名主職はその配下だった大舘清右衛門家に移り、それを期に清右衛門系が傳右衛門系より優位になり、ついに清右衛門家は花井氏の地代官（名主出身の代官）にもなり、苗字帯刀槍一筋御免となり、弘化 4 年（1847 年）には、武蔵国入間郡に「大舘氏碑」を建立し総本家を自称するようになりました。その碑文によると、大舘式部義隆という人物が新田義貞の鎌倉攻めに従い戦死し、その子主税義信というのが、新田義興が武蔵国で誅殺されたとき以降、現在の地に帰農したといいます。しかし大舘義隆・義信なる人物は史料上に見えず、「帰農」という概念は身分制が固まる江戸期以降のことである。この系譜は、地代官任命時に創作された可能性が高く、信憑性に問題があるとされています（所沢市史編さん関係資料群）。傳右衛門系・清右衛門系を含め、この地域の大舘一族が実際に新田大舘氏の系譜を引くのかは同時代の史料的には確かめられていません。

17、18：

(4-5):新田義貞の生い立ちから鎌倉幕府倒幕まで(スライド名‥2 枚)

※:新田　義貞(にった　よしさだ):

- 鎌倉時代後期から南北朝時代にかけての御家人・武将。正式な名は源 義貞（みなもと の よしさだ）。
- 河内源氏義国流新田氏本宗家の8代目棟梁。父は新田朝氏、母は不詳（諸説あり、朝氏の項を参照）。官位は正四位下、左近衛中将。明治15年（1882年）8月7日贈正一位。
- 鎌倉末期から南北朝の混乱の時代にあって、足利氏と並び武家を統率する力のある家系であった新田家の当主で、足利尊氏の対抗馬であり、好敵手でもあった。ただし、鎌倉時代後期の新田家は足利家に対して従属関係にあり、延元の乱以前の義貞は尊氏の指揮下の一部将であったとする研究もある。また、軍記物語『太平記』においては、前半の主人公の一人とも言える存在である。
- 鎌倉幕府を攻撃して滅亡に追い込み、後醍醐天皇による建武新政樹立の立役者の一人となった。しかし、建武新政樹立後、同じく倒幕の貢献者の一人である足利尊氏と対立し、尊氏が建武政権に反旗を翻すと、後醍醐天皇により事実上の官軍総大将に任命されてこれに対抗した。これにより各地で転戦したものの、箱根や湊川での合戦で敗北し、のちに後醍醐天皇の息子の恒良親王、尊良親王を奉じて北陸に赴き、越前国を拠点として活動するが、最期は越前藤島で戦死した。東国の一御家人から始まり、鎌倉幕府を滅ぼして中央へと進出し、その功績から来る重圧に耐えながらも南朝の総大将として忠節を尽くし続けた生涯だった。
- 死後、江戸時代に義貞が着用していた兜が偶然見つかり、福井藩主松平光通は兜が発見された場所に新田塚を建てた。明治時代、福井知藩事・松平茂昭は新田義貞のために新田塚に祠を建て、のち義貞を主祭神する藤島神社となり、建武中興十五社の一つに列せられた。

19：

(4-6):笠懸野(スライド名‥1枚)

※：義貞の育った上野国新田荘（にったのしょう、現在の群馬県太田市周辺）：気象の変化が激越で、夏は夕立による雷鳴の轟きと集中豪雨がすさまじく、冬は強烈な空っ風が吹き荒れる風土であった。また扇状地の扇央部分には灌木、草木が繁茂した広漠な荒地が広がっていて、新田一族が弓術などの武芸を鍛錬する練習場となっており、笠懸野という地名で呼ばれていた義貞はそのような風土の中で、笠懸野で弓馬といった武芸の研鑽を積み、利根川で水練に励みながら強靭に育っていったと考えられている。また、気象変化に富む新田荘での生活が、義貞の激しい気性と義理人情に厚い性格を形成したとされる。

20、21：

(4-7):新田義貞関連の画像(スライド名‥2枚)

新田義貞関連の画像(1)

新田義貞の画像(藤島神社蔵)

※：明治20年（1887年）に松平春嶽・茂昭から奉納された作品。画中の落款には、狩野探幽筆の義貞像を破笠が写したものだと記されているが、探幽の原画は確認されていない

※：**狩野 探幽(かのう たんゆう、慶長7年1月14日(1602年3月7日) － 延宝2年10月7日(1674年11月4日))は、江戸時代初期の狩野派の絵師。狩野孝信の子。法号は探幽斎、諱は守信。早熟の天才肌の絵師、と評されることが多いが、桃山絵画からの流れを引き継ぎつつも、宋元画や雪舟を深く学び、線の肥痩や墨の濃淡を適切に使い分け、画面地の余白をに生かした淡麗瀟洒な画風を切り開き、江戸時代の絵画の基調を作った。**

※：小川 破笠（おがわ はりつ、寛文3年（1663年） － 延享4年6月3日（1747年7月10日））は、江戸時代の俳人、漆芸家。また肉筆浮世絵を描いたことでも知られる。

新田義貞の兜

※：新田義貞のものとされる兜（国重文）は、江戸時代の初期、灯明寺畷（福井市新田塚）の泥田で近くの農民が発見し、それを福井藩士の井原番右衛門が新田義貞のものと鑑定しました。鑑定結果は、唐草文の銀象嵌（ぎんぞうがん）のある四二間の筋線の間に、宮中を守護するという三十番の神号が沈刻してあったこと、暦応元年（1338）閏7月2日、兜が発見された付近で義貞が戦死（8月28日の日記参照）したと伝えられていること、などが決め手になったと伝えられています。この兜は現在、新田義貞を祭神とする藤島神社（福井市毛矢）に保管されています。

新田義貞関連の画像(2)
太刀を海に投じる新田義貞(月岡芳年画)
新田義貞と稲村ヶ崎(歌川広重画)

22：

(4-8):小説『新田義貞』から
小手指ヶ原の記述
※：新潮文庫「新田義貞」下巻　昭和 56 年 11 月 25 日発行‥分倍河原の合戦より
※：小手指原は、一部クヌギ林があるだけで全体は茶畑になっている。狭山茶の本場だけあって手入れは行き届いていた。
付近の古老に聞くと、明治のころまでは、ここは分倍河原と同じように、草原と雑木林だったそうである。水の便が悪い荒地だったということである。小手指原に立って北の方を見ると、陽炎の中に塚らしいものが見えた。白旗塚である。これは源氏の白旗とも新田氏とも関係なく、江戸時代に富士講の人たちがこしらえた人工の丘で、浅間社が祭ってあったということであった。

23：

(4-9):太平記
※：南北朝時代の軍記物語。作者は未詳であるが，小島法師（1374 没）説，玄恵（げんえ。1269～1350）説などが有力。 40 巻（巻二十二欠）。数次にわたって増補改編され，建徳 2＝応安 4（71）年頃大成か。五十余年にわたる南北朝，公武の抗争を描く長編で，内容は 3 部に分れる。第 1 部（巻一～巻十一）は鎌倉時代，北条高時の失政，後醍醐天皇の討幕に起筆，北条氏の滅亡，建武中興の成立まで。第 2 部（巻十二～巻二十一）は中興政治の失敗，足利尊氏の謀反，楠木正成，新田義貞の戦死，天皇崩御まで。第 3 部（巻二十三～巻四十）は南北両朝の対立，諸将の向背常ならぬさまを描き，正平 23＝応安 1（68）年義満を補佐する細川頼之の執事就任をもって結ぶ。物語僧によって語られ，「太平記読み」として講釈され講談の祖となった。後代文学への影響も大きい。

⑸ バス旅行の訪問地

24：

バス旅行訪問地ガイド(マップ)(スライド名‥1 枚)

25：

バス旅行の訪問地(1)(スライド名‥1 枚)
❑:さざえ堂
※:祥寿山曹源寺(しょうじゅざんそうげんじ):曹洞宗の寺院で、寺伝によると新田氏の祖義重が京都から迎えたという養姫である祥寿姫の菩提を弔うため、文治3年(1187)に開基したと伝えられています。また、境内には薗田氏一門により造立されたと考えられる名号角塔婆や中興開基と伝えられる横瀬氏の五輪塔があります。
※:江戸時代に本堂が火災に遭い、その後、観音堂が造られ、観音堂を本堂としています。観音堂はさざえ堂と呼ばれ、江戸時代中期に普及・発展した三十三観音・百観音信仰を背景に、関東・東北地方に限って建造された三匝堂(さんそうどう)のひとつです。寛政 10 年(1798)に創建された建物で、間口・奥行ともに9間(約 16.3m)、高さ 55.5尺(約 16.8m)であり正面は東向きです。外観は重層の二階建に見えますが、内部は三層になっています。堂内には秩父、坂東、西国の観音札所計百ヵ寺の観音像を安置し、右回りに堂内を一方通行で巡拝できることから「さざえ堂」の名があります。現在、埼玉県本庄市の成身院、福島県会津若松市の旧正宗寺、茨城県取手市の長禅寺などがありますが、曹源寺のさざえ堂が最大です。
❑：三匝堂（さんそうどう）は、江戸時代の後期に関東から東北地方の寺院に建てられた特異な建築様式の仏堂です。
堂内は右回りに初層から三層まで登る斜路の回廊となっており、また、同じ所を二度通ることなく元の入口に出られる下りの回廊とからなる二重の螺旋（らせん）構造となっています。
　国語辞典によると「匝」とは何らかの周を一回まわること、と言う意味。三回まわるから本来は「三匝堂」と言うが、その構造がサザエの貝殻に似た「らせん構造」となっていることから、通称、栄螺堂（さざえどう）と呼ばれています。
　また、順路に沿って堂内を進むだけで一時に諸国の霊場、諸仏を巡礼できるようになっている。「曹源寺」の栄螺堂では、１階に「秩父三十四観音」、２階に「板東三十三

観音」、３階に「西国三十三観音」の計百札所の観世音菩薩を模した観音様が安置されており、栄螺堂を巡拝すれば百カ所の札所を巡ったのと同じご利益があるとされています。

❑：史跡金山城跡ガイダンス施設

※：太田市のシンボルで金山を広く伝えること目的に開館した施設。館内には金山城跡についてのデータベースやジオラマ、戦国時代の様子を上映する大スクリーンなどを無料で見学することが出来ます。

26：

バス旅行の訪問地(2)（スライド名‥1 枚）

❑：金山城址

※：概要‥金山城は、戦国時代に造られた城で、金山全体の自然地形を利用して造られた「山城」という種類の城です。山頂を中心として金山全山にその縄張りが及ぶ金山城跡は、昭和 9 年に国の史跡指定を受けました。

※：指定区分‥国指定史跡

※：時代‥築城：文明元年(1469)／廃城：天正 18 年(1590)

※：歴代城主‥新田岩松氏/横瀬・由良氏/小田原北条氏

※：特徴‥標高 239mの金山山頂の実城(みじょう)を中心に、四方に延びる尾根上を造成、曲輪とし、これを堀切・土塁などで固く守った戦国時代の山城です。特筆されるのは、石垣や石敷きが多用されており、戦国時代の関東の山城に本格的な石垣はないとされた城郭史の定説が金山城跡の発掘調査で覆されました。 主な曲輪群は実城・西城・北城(坂中・北曲輪)・八王子山の砦の 4 箇所ですが、山麓にも、城主や家臣団の館・屋敷があったと考えられ、根小屋(城下)を形成していたと見られます。

❑：新田神社

※：金山丘陵の頂上、標高約二百三十メートル　金山城本丸跡に新田義貞を祀る新田神社が明治七年に造営されました。神社境内には樹齢四百年以上とされる大欅がそびえたってます。

27：

バス旅行の訪問地(3)（スライド名‥1 枚）

❑：生品神社（新田荘遺跡）

※：元弘３年（1333）５月８日、新田義貞が後醍醐天皇の綸旨（りんじ）を受けて、鎌倉幕府を滅ぼすための兵を挙げたところです。「太平記」には「五月八日ノ卯刻ニ、生品明神ノ御前ニテ旗ヲ挙、」（巻第十）と記載されています。神社に参集した軍勢は 150 騎に過ぎませんでしたが、兵を進めるに従い数を増やしていったということです。

※：生品神社境内は、昭和９年（1934）に「生品神社境内新田義貞挙兵伝説地」として国史跡に指定されました。境内には義貞が旗を挙げたと伝えられる「旗挙塚（はたごつか）」や陣を構えたと伝えられる「床几塚（しょうぎつか）」があり、神社拝殿の前には義貞が軍旗を掲げたと伝えられるクヌギの古木（市重文）が保存されています。

❑：矢太神水源（新田荘遺跡）

※：太田市の北西部は大間々扇状地に立地していることから、「扇端部」の標高 60m の地点を中心として多くの湧水が見られます。矢太神水源（やだいじんすいげん）は、これらの中でも最も豊富な水量を誇っています。

北側に湧水点があり、この南側には東西 15m、南北 80m の沼（矢太神沼）があります。

※：湧水点では湧水が砂を舞い上げる自噴現象を観察することができます。この地点には「ニホンカワモズク」という、貴重な紅藻類が生息しています。これはかつてこの地が海であった時代に陸に閉じ込められたものが、次第に環境に適応して現在の姿になったと考えられています。

※：仁安３年（1168）の「新田義重置文」（長楽寺文書、国重文）は、「空閑の郷十九郷」を頼王御前（世良田義季）の母に譲ることが書かれた古文書で、新田荘が開発された様子を知ることができます。ここには「上江田・下江田・田中・小角・出塚・粕川・多古宇（高尾）」などの郷名が書かれています。これらの郷は石田川水系に立地していることから、新田荘の開発に石田川の水が利用されたことが分かります。矢太神水源は石田川の源流であり、新田荘の開発に湧水地の水が利用されたことを証明する貴重な史跡です。

28：

バス旅行の訪問地(4)（スライド名‥1 枚）

❑：長楽寺（新田荘遺跡）

※：世良田山真言院長楽寺（せらださんしんごんいんちょうらくじ）は、新田氏の祖新田義重（にったよししげ）の子、徳川（新田）義季（よしすえ）を開基とし、日本臨済宗の祖栄西の高弟栄朝（えいちょう）を開山として、承久３年（1221）に創建された「東関最初禅窟（とうかんさいしょぜんくつ）」

です。
　鎌倉時代は、約6万坪の境内に塔頭寺院（たっちゅうじいん）が軒を並べ、多くの学僧が兼学修行に励んだといわれます。室町時代の初期に日本五山十刹（ござんじっせつ）の制度が成立すると、長楽寺は十刹の第7位になりました。しかし、新田氏の衰退とともに長楽寺も荒廃してしまいました。
　徳川家康は、天正 18 年（1590）小田原北条氏攻めの功により、関東の地を与えられました。そこで、祖先開基の寺とする長楽寺を、天海（てんかい）大僧正を住職として復興に当たらせ、寺領 100 石を与えました。天海は臨済宗から天台宗に改宗し、境内を整備し、伽藍（がらん）を修復し、幕府庇護のもと末寺 700 寺有余の大寺院に成長させました。
　現在、境内には文殊山（もんじゅやま）の中世石塔群や蓮池、江戸時代の建物である勅使門（県重文／ちょくしもん）、三仏堂（県重文）、太鼓門（県重文／たいこもん）、開山堂などがあります。

❑：東照宮（新田荘遺跡）

※：世良田東照宮（せらだとうしょうぐう）は長楽寺住職天海大僧正の発願により、日光から長楽寺境内に勧請（かんじょう）された神社です。本殿（ほんでん）・唐門（からもん）・拝殿（はいでん）と鉄燈籠（てつとうろう）は国指定の重要文化財の建造物です。
　日光東照宮は、家康の死後2代将軍徳川秀忠によって創建されましたが、寛永 13 年（1636）3代将軍徳川家光によって、全面的に改築され現在の姿になりました。天海は、社殿の造り替えの際、旧奥社の拝殿と宝塔（現存せず）を、徳川氏祖先の徳川（新田）義季（よしすえ）が開基した長楽寺の南西部分に移しました。
　遷座（せんざ）は寛永 21 年（1644）10 月 11 日に行われました。幕府は寺領 100 石に合わせて、神領 200 石の朱印地（しゅいんち）を長楽寺に与え、合計 300 石を領した長楽寺を別当寺として、東照宮の管理と祭祀にあたらせました。また社殿等の修理は幕府によって直接行われました。
　境内には、長楽寺5世住持月船琛海（げっせんしんかい）の塔頭（たっちゅう）である普光庵跡（ふこうあんあと）があり、月船の遺骨とともに弟子6人の遺骨も葬られた普同塔（ふどうとう）であることも確認されています。

29：

バス旅行の訪問地(5)

❑：新田荘歴史資料館

※：新田荘歴史資料館は、東毛広域市町村圏振興整備組合から移管を受けた東毛歴史資料館（昭和60年開館）を名称変更して、平成21年4月に開館しました。

❒：常設展示

原始・古代：旧石器時代の遺跡は、丘陵部ばかりでなく、沖積地の低台地縁辺部でも確認でき、市域では1万5千年前の旧石器時代後期まで足跡を遡ることができます。
縄文時代の遺跡は、日本最古期の土器文化である爪形文土器を出土した草創期の下宿遺跡にはじまり、前期の間之原遺跡を経て、晩期の大道東遺跡まで、粗密の差はあるものの、遺構が確認できます。
　さらに奈良時代には、全国最大規模を誇る史跡「上野国新田郡庁跡」（天良町）、並びに東山道遺構など、古代の郡郷制を知る遺構があります
平安時代の終わり頃になると、新田義重は、浅間山の噴火によって荒廃した「空閑の郷々」と呼ばれた荒蕪地を開発し、久寿元年（1154）頃荘園を興し、保元2年（1157）に花山院藤原忠雅家領新田荘の下司職に補任されています。荘域は嘉応2年（1170）には新田郡全域へと拡大し、庶子家の拡大と相俟って勢力を広げております。また、金山東の山田郡域には久寿3年（1156）、園田御厨が成立し、併せて同じ頃寮米御厨や大蔵保など、伊勢神宮関係の所領が見られ、金山丘陵を介した所領経営の相違が見て取れます。

中世：平安時代の終り頃、源氏の流れをくむ源義国父子は新田郡を中心に開発を進め、子の義重は領地を広げて新田荘を興し、東国武士の礎を築きました。新田氏の一族は上野国を中心に栄え、鎌倉幕府を倒幕し、建武新政を成し遂げた新田義貞のような武将を生みましたが、その後室町・戦国時代には衰退し、戦国末期には上杉・武田・北条氏の勢力が相争う地となっています。
　中世を代表する文化財には、複合的な11カ所の遺跡からなる荘園遺跡としての史跡「新田荘遺跡」があります。
　また、中世戦国時代の文化財として史跡「金山城跡」があります。文明元年（1469）、岩松家純により築城された中世の山域で、金山丘陵のほぼ全域に及び、街場に近い里山としての自然景観と相俟った存在は貴重です。

近世：天正 18 年（1590）徳川家康は関東に入部すると、江戸北辺の要地である館林に徳川四天王の一人榊原康政を配置しますが、市域の多くは館林藩領となっています。
なお当地域は、利根川の水運や、日光例幣使道（木崎宿・太田宿）及び足尾銅山街道沿いにあり、交通も栄えており、江戸や京都などの文化も流入しています。こうしたなか明治維新の

先駆者ともいえる勤王思想家、高山彦九郎が輩出されています。
また、徳川家康によって、先祖とした新田義重をまつる大光院（呑龍様）が、慶長 18 年（1613）金山の南麓に建立されます。

近代：明治維新を迎え、市域の大半は岩鼻県に属しました。明治4年（1871）の廃藩置県により、東毛3郡（新田・山田・邑楽）は栃木県に属しましたが、明治9年(1876)に群馬県に属しました。

30：

バス旅行の参考史跡(1)

❑：円福寺（新田荘遺跡）

❑：円福寺境内

※：円福寺境内円福寺（えんぷくじ）は、正式名を御室山金剛院円福寺といいます。真言宗の寺で、新田本宗家第4代の新田政義（まさよし）が開基したと伝えられ、政義が京都御室の仁和寺（にんなじ）から招いた阿闍梨静亳（あじゃりじょうごう）が開山（初代住職）といわれます。

※：『吾妻鏡』によれば、政義は寛元2年（1244）京都大番役として在京中、幕府の許可を得ず突然出家したため幕府の咎（とが）めを受けて所領を没収され、由良郷別所村に蟄居（ちっきょ）することとなりました。円福寺が開かれたのはその頃と考えられます。

❑：新田氏累代の墓

※：境内には、新田氏累代の墓と伝えられる20基余りの凝灰岩製の石層塔・五輪塔群があり、そのうちの1基には元亨4年（1324）に「沙弥道義（しゃみどうぎ）」（新田義貞の祖父である新田基氏の法名といわれる）が72歳で逝去したことが記されています。

❑：石幢（せきどう）

※：また安山岩製の石幢（せきどう）があり、長享3年（1489）の銘文と六地菩薩像・延命地蔵一体が刻まれています。銘文中にある「宗悦上座」は横瀬国繁、「宝泉禅門」は岩松満国の法名とされています。

31：

バス旅行の参考史跡(2)

❑：十二所神社（新田荘遺跡）

❑：十二所神社境内

※：十二所神社（じゅうにしょじんじゃ）は、円福寺本堂の西、茶臼山（ちゃうすやま）古墳の後円部墳頂近くにあります。創建された時代は不明ですが、中に全部で 16 体の神像が安置されています。

※：そのうち5体（市重要文化財）には正元元年（1259）の銘があり、その1体には、円福寺初代住職である阿闍梨静亳（あじゃりじょうごう）が、現世安穏と極楽往生を祈願して、同年 10 月5日に造像したことが刻まれています。

※：平安時代は神仏習合が進み、中世に入ると日本の神々を仏教の如来や菩薩の権現とする考えが一般化し、神殿内に仏を安置し、寺院境内に神々を祀ることが普及しており、ここにもその一端を伺うことができます。

❑：十二所神社の神像

※：本殿の中に国常立尊（くにのとこたちのみこと）など 16 体の神像が安置されています。ともに 30 ㎝弱ほどの木彫一木造りで、胡粉（ごふん）を塗った後に彩色がほどこされています。16 体のうち 5 体に正元元年(1259)銘があり、市の重要文化財に指定されています。

※：また、1 体の背面上部に「阿岐（あき）天神」、背面下部の左右に「右志者為阿闍梨静亳（あじゃりじょうごう）」「現世安穏後世善処往生極楽也」、中央に「正元元年己未十月五日」の刻銘があり、日付の下に花押(かおう)が刻まれています。銘文に見られる「阿闍梨静亳」は、新田政義により仁和寺(京都市右京区御室)から招かれた円福寺開山とされ、神像が静亳自身により生前の安穏と来世の安楽を祈って造像奉安されたと推定されます。神像は神仏習合思想の影響により崇拝の対象として作られたものです。

※：「国良親王の御陵」・・国良親王は、新田義貞公と勾当内侍の子である山吹姫と、後醍醐天皇の皇子である宗良親王の間に生まれた皇子となり、国良親王が新田ノ荘にいて、ここに葬られたらしいです。

32：

バス旅行の参考史跡(3)

❑：円福寺茶臼山古墳（新田荘遺跡）

❑：円福寺茶臼山古墳

※：円福寺茶臼山古墳は、長さ 168mの大前方後円墳です。墳頂部や墳丘裾部は、後世の円福寺や十二所神社等の建物を造った時に削られて、原形がそこなわれていますが、市内では天神山古墳に次いで第2位、県内でも第3位の規模を誇っています。

※：中程にある平坦面には円筒埴輪が立て並べられているのが確認されています。墳丘の周りに巡らされた堀はほとんどが埋まっていますが、後円部の北側に今もその名残りがあります。造られた時期は、5世紀前半頃と考えられています。「宝泉茶臼山古墳」、「別所茶臼山古墳」とも呼ばれます。

33：

バス旅行の参考史跡(4)

❑：総持寺（新田荘遺跡）

❑：総持寺境内

※：総持寺は、2町四方（一辺 200m）の規模を有した、鎌倉時代の総領家クラスの新田館跡に建てられた寺で、別名を「館の坊」といいます。寺の正式名称は威徳山陀羅尼院総持寺（いとくさんだらにいんそうじじ）です。

※：寺伝によると正平年間（1346～1370）に慶範（栃木県足利市小俣町にある鶏足寺の尊慶の法弟）が、岩松八幡宮の別当寺の真光寺・世良田町の清泉寺・「館の坊」の3ヶ寺を合わせて一寺とし、真光寺と称しました。その後、慶賢が総持寺と改称したといわれています。

※：この新田館跡は、西の早川を背にして、三方を堀にした館跡で、東と西の一部に堀の跡が残っています。居住者は新田荘の立荘者で、新田一族の祖新田義重居館説、本宗家4代の新田政義の失脚後、一時期新田氏を代表した世良田頼氏（徳川義季の子）居館説、新田義貞居館説などがあります。

※：境内地の梵鐘は世良田祇園の宵宮に、普門寺の梵鐘と呼応して屋台の曳き下がりの合図に使用されていました。また、8月1日には「義貞様」（新田義貞の木造と伝えられた神像・市重文）を祀る行事があります。

❑：総持寺の梵鐘

※：威徳山陀羅尼院総持寺（いとくさんだらにいんそうじじ）は真言宗豊山派の寺で、寺伝によれば新田総領家の館「新田館」の地内に建てられた寺です。新田氏の祖義重は、領内岩松に石清水八幡を勧請し、別当寺として真光寺を建てました。また、新田館には護摩道場を建立し「館の坊」と称しました。正平年間（1346～1370）小俣鶏足寺尊慶上人の法弟慶範は、岩松の真光寺と世良田の清泉寺、「館の坊」の3寺をあわせて1寺として真光寺とし、中興開山となりました。同寺の第2世慶賢は、寺名を総持寺と改めました。

※：この寺の梵鐘（ぼんしょう）は、享保 16 年（1731）に佐野天明の鋳物師（いもじ）、太田甚左衛門藤原秀次により製作されたものです。青銅で造られており、口径は 55cm、高さは 127cm です。乳の間には乳がなく、梵字の金剛界五仏（大日如来（だいにちにょらい）・阿閦如来（あしゅくにょらい）・宝生如来（ほうしょうにょらい）・阿弥陀如来（あみだにょらい）・不空成就如来（ふくうじょうじゅにょらい））の五座があります。池の間には、梵字百字真言（四区）鐘銘（一区）176 文字の銘文があり、撞座（しゅざ）には梵字の胎蔵界五仏（大日如来・宝幢如来（ほうとうにょらい）・開敷華王如来（かうふけおうにょらい）・無量寿如来（むりょうじゅにょらい）・天鼓雷音如来（てんくらいおんにょらい））の五座があります。梵鐘は、時を告げるのは勿論、煩悩を持つ衆生（しゅじょう）を救うために撞くものでもありました。総持寺の梵鐘は、世良田祇園の宵宮（よいみや）に普門寺の梵鐘（市重文）と呼応して屋台の町内引き廻しの合図にも使用されていたという特色を持っていました。

34：

バス旅行の参考史跡(5)

❑：明王院安養寺（新田荘遺跡）

❑：明王院境内

※：呑嶺山明王院安養寺（どんれいさんみょうおういんあんようじ）は、真言宗豊山派の寺院で、2町四方（一辺 200m）の規模を有した、鎌倉時代の総領家（そうりょうけ）クラスの安養寺館跡に建てられた寺です。

※：不動堂には、二対の不動明王が納められており、そのひとつは1寸8分（約5．5cm）の白金製で、元弘3年（1333）新田義貞の鎌倉攻めの際、山伏（やまぶし）に化身（けしん）して越後方面の新田一族に一夜にして触れ回ったと伝えられ、「新田触不動（にったふれふどう）」として知られています。

※：木造二天像（市重文）を安置する山門を入った左手には、境内から出土した新田義貞の弟脇屋義助（わきやよしすけ）の供養塔婆（くようとうば）である「源義助」と刻まれた板碑（いたび）があります。本堂裏手には、安養寺十二坊のひとつである薬師坊に祀られていた南北朝期の石仏である薬師如来像（市重文）があります。

※:また、本堂東側には延享4年(1747)に建立された千体の不動明王像を刻んだ高さ6m のピラミッド状の千体不動塔(市重文)があります。
※:安養寺館跡は、土塁(どるい)・掘割(ほりわり)は現状では見られませんが、安政2年(1855)の安養寺村絵図や昭和の地籍図には掘割が確認できます。居住者は、死後に「安養寺殿」と諡(おくりな)された新田義貞が有力です。

❑:源義助の板碑

※:源義助の板碑は、昭和 8 年に、明王院境内の樫の大木下より出土。高さ 119cm、幅 35cm の緑泥片岩(秩父青石)の武蔵形板碑。板碑の上部に、蓮華座と弥陀の種子キリークが彫刻され、その下方に梵字光明真言と銘文が刻まれています。
※:源義助は、新田義貞の弟で、脇屋(太田市脇屋)に館を構え、脇屋次郎義助と称していた。義助は、義貞と共に鎌倉を攻め滅ぼし、延元 3 年(1338)義貞の戦死後、新田一族を率い南朝方として奮戦するが、伊予の国府において康永元年(1342)に病没。この板碑は義助の菩提を弔うために明王院に建てられたと思われている。
※:境内から出土した新田義貞の弟脇屋義助の供養塔婆(くようとうば)である「源義助」と刻まれた板碑(いたび)があります。安養寺館跡は、土塁(どるい)・掘割(ほりわり)は現状では見られませんが、安政2年(1855)の安養寺村絵図や昭和の地籍図には掘割が確認できます。居住者は、死後に「安養寺殿」と諡(おくりな)された新田義貞が有力です。

35:

バス旅行の参考史跡(6)

❑:江田館(新田荘遺跡)

❑:江田館跡

※:太田市の北西部は大間々扇状地に立地していることから、扇端部の標高 60mの地点を中心として多くの湧水が見られます。重殿水源は、現状では、周囲を民家や工場に囲まれ、四方を石垣とコンクリートで護岸された東西 10m、南北 23m の小さな池です。北西の角には3基の石のほこらがあり、かつての面影をうかがうことができます。この東側には一級河川、大川の源流であることを示す標柱が立てられています。

元亨2年(1322)の「関東裁許状」(正木文書)によると、大館宗氏と岩松政経が「一井郷沼水」から流れ出た「用水堀」を巡って争論を起こしたことに対して、鎌倉幕府が判決を下したことが分かります。この古文書にある「一井郷沼水」が重殿水源であると考えられています。

新田荘は大間々扇状地の扇端部に位置していることから豊富な湧水に恵まれ、荘園を経営するために湧水が利用されたと考えられています。かつては実際に市野井・金井・赤堀・木崎など多くの地域がこの水を農業用水として利用していました。重殿水源はこういったことを証明する貴重な史跡です。

※:江田館跡は、木崎台地の西端部に立地しています。新田荘を代表する館跡のひとつで、昭和 22 年に群馬県史跡第1号に指定されていましたが、平成 12 年に新田荘遺跡として国史跡に指定されました。

堀之内と呼ばれる部分は、東西約 80m、南北約 100m の方形で、堀がほぼ全周し、この内側には土塁が巡らされています。南辺と東辺の二箇所では堀が切れ、虎口が造られています。

堀の東辺と西辺は、外敵を防御するために直角に折れ曲がっています。周囲には黒沢屋敷、毛呂屋敷、柿沼屋敷と呼ばれる郭があり、反町館跡と同様戦国時代に城郭化されたと推定されます。

築造年を示す史料はありませんが、反町館跡と同様、鎌倉時代から南北朝時代の築造と推定されます。鎌倉攻めに従軍した江田行義の館であったと伝えられ、その後、戦国時代には金山城主横瀬氏の家臣矢内四郎左衛門が館を拡張して住んだと伝えられています。

北側の土塁には「義貞様(ぎていさま)」と呼ばれる祠があります。江田館跡はほぼ築造された当時の姿をとどめている貴重な館跡です。

❑:重殿水源(新田荘遺跡)

※:太田市の北西部は大間々扇状地に立地していることから、扇端部の標高 60mの地点を中心として多くの湧水が見られます。重殿水源は、現状では、周囲を民家や工場に囲まれ、四方を石垣とコンクリートで護岸された東西 10m、南北 23m の小さな池です。北西の角には3基の石のほこらがあり、かつての面影をうかがうことができます。この東側には一級河川、大川の源流であることを示す標柱が立てられています。

元亨2年(1322)の「関東裁許状」(正木文書)によると、大館宗氏と岩松政経が「一井郷沼水」から流れ出た「用水堀」を巡って争論を起こしたことに対して、鎌倉幕府が判決を下したことが分かります。この古文書にある「一井郷沼水」が重殿水源であると考えられています。

新田荘は大間々扇状地の扇端部に位置していることから豊富な湧水に恵まれ、荘園を経営するために湧水が利用されたと考えられています。かつては実際に市野井・金井・赤堀・

木崎など多くの地域がこの水を農業用水として利用していました。重殿水源はこういったことを証明する貴重な史跡です。

36：

バス旅行の参考史跡(7)

❑：反町館（新田荘遺跡）

※：中世平城の典型「反町館」の本丸の跡にあたり、今でも南、西、北、東に土塁と水をたたえる水濠が往時の面影を伝えている。新田義貞が1329～1330年に居住していたといわれている。写真右は、本丸跡にある妙光院瑠璃山照明寺。義貞の母、妙光院殿蓮法大禅尼の位牌が保存されている。本尊は厄除薬師として有名で正月四日の大祭には、大勢の参詣人で賑わう。

※：新田義貞ファンにとっては生品神社とともに反町館は聖地の一つであります。現在、反町薬師のある場所が反町館です。ここは四月下旬から藤の花がとてもきれいなところです。義貞はここでいろいろと思い悩み、鎌倉に出撃する決断を下したのでしょうか。城跡は良く残っており堀を一周しながら義貞の一生について考えてみるのも悪くはありませんよ。境内裏には土塁や櫓台のような遺構も残ります。※新田義貞の館は尾島・安養寺にある明王院の可能性があります。

※：反町館は新田荘を代表する館跡です。昭和 33 年に群馬県史跡に指定されましたが、平成 12 年に新田荘遺跡として国史跡に指定されました。

※：平面形は凸字型で、東西方向は南辺で 138m、北辺で 75m あり、南北方向は 115m あります。周囲には常時水をたたえる堀が巡らされています。東側の堀の北半部は県道改修の際に二倍以上の幅に広げられています。堀の内側の南・西・北には土塁が残っています。

※：築造された年代は明らかではありませんが、鎌倉時代から南北朝時代ころに築造されたと考えられます。その後、室町時代に金山城の支城となりましたが、戦国時代になって三重の堀を巡らす城郭に拡張されたと推定されています。

※：現在、館跡は瑠璃山妙光院照明寺の境内となっており、毎年 1 月 4 日の縁日には大勢の参詣人でにぎわいます。

※：照明寺本堂の裏には、義貞が軍議を開いた時に、鳴いている蛙の声を静めたという伝承を持つ「不鳴の池」があります。